なぜ私は菅官房長官への質問を続けるのか

（毎月1回10日発行　昭和58年3月10日第三種郵便物認可）

映画「OKINAWA 1965」を語る
嬉野京子さん（写真家）
③面

「安倍改憲」阻む
かつてない共同を
渡辺治さん（一橋大学名誉教授）
②面

全国革新懇の3つの共同目標

①日本の経済を国民本位に転換し、暮らしが豊かになる日本をめざします。
②日本国憲法を生かし、自由と人権、民主主義が発展する日本をめざします。
③日米安保条約をなくし、非核・非同盟・中立の平和な日本をめざします。

全国革新懇ニュース

2017.7・8月合併号
（発行日8月10日）
391
購読お申し込み☎03(6447)4334
年間購読料1820円・送料込

発行所　平和・民主・革新の日本をめざす全国の会
（全国革新懇）発行人・乾　友行
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷1-7-8　千駄ヶ谷尾澤ビル1階
☎03(6447)4334　FAX03(3470)1185　郵便振替　00170-5-20213
ホームページ http://www.kakushinkon.org/ Eメール zenkoku@kakushinkon.org

なぜ私は菅官房長

革新懇インタビュー

望月衣塑子（いそこ）さん
東京新聞社会部記者

撮影　片桐直樹

1975年、東京生まれ。慶応義塾大学法学部卒業後、東京・中日新聞に入社。千葉、神奈川、埼玉などの県警、東京地検特捷部、東京地裁・高裁など担当。経済部を経て社会部遊軍記者。軍学共同や武器輸出を主テーマに取材。加計学園問題を追及し、内閣記者会見で質問。著書に『武器輸出と日本企業』（角川新書）、共著に『武器輸出大国ニッポンでいいのか』（あけび出版）

加計学園問題で注目された「総理のご意向」文書。それを「怪文書」として葬り去ろうとする菅官房長官に鋭く質問を続けて食い下がった東京新聞・社会部の望月衣塑子記者。この会見の翌日、世論の広がりに追い込まれた文科省は文書の再調査に乗り出しました。

「私たちの知る権利を守るためにすい星のごとくあらわれた記者」（翻訳家・池田香代子さん）という評も。記者会見で望月さんが手をあげ続けた思いを知りたくてお会いしました。

（聞き手　乾　友行）

「文書は確実に存在する」と会見で明らかにした前川さん（喜平文科省前事務次官）に直接、くわしく話を聞きました。告発に踏み切った思いの深さを知りました。大変な苦しさを乗り越え、当事者としての勇気、決心を持って証言された。政治がこんなに歪められ、私物化されている疑惑があるのに放置されていいのか―、どうしても直接、菅さんに問いただしたい、という思いを強めました。菅さんを追及することで私が受けるかも知れないいやがらせなどにたじろいでどうするか、国民の「知る権利」のいわば代弁者として会見に臨むことができる記者が質問しなくて何が記者だ、と考えました。それとまあ、私にはネジが1本抜けて、空気が読めないところがあるからできたかもしれませんね（笑）。こんな質問を続ければ、周りにどんな影響があるか、どんないやがらせがあるか、など気にしていたら、できなかったでしょう。勿論、会見に出たら政権を敵に回すことにもなりかねないという恐怖は、前川さんの話などから感じてはいましたが。

弱い側の人に寄り添う

新聞記者としては、権力側ではなく、弱い側にたっていたい。判断に迷ったときは、弱い側の人に寄り添って判断する、これを大切にしたいです。質問するときはそこに気持ち、怒りを載せたい。私の質問が反響を呼んだとすれば、安倍一強のもと、「こんなことがまかり通るのか」という不満や批判が国民のなかに鬱積していた、いわばそれを突破してゆく流れのひとつの表象になったかも知れませんね。東京新聞にもたくさんの激励メール、電話、手紙をいただき、有難く思っています。しかし、私がしなくてもいまの政治の流れの中で、他の誰かがいつか踏み出していたのではないかとは思います。

しみ込んだ平和の力

安倍さんがどういう日本をつくろうとしているのか。私は武器輸出問題を取材していますが、安倍さんのいう世界で重要な役割を果たす国というのは、自衛隊の海外派兵もおこなう、欧米列強などとならんで武器も輸出する、軍産複合体がのさばる国家のように思えるのです。これは、日本が9条を中心に戦争をしない国を目指した、現行の憲法のもとで歩んできた国とは方向が違う、平和をかかげてきた国家のあり方がゆらいでいるのではないか、と危惧しています。しかも学校ひとつ造ることにも「総理のご意向」がまかり通る社会になっている。民主主義国家なのか、問われているように思います。この道が本当に人びとに幸せをもたらすのか、現在の状況を伝え、国民へ警鐘を鳴らさなければならないと感じています。

取材していると、危険な事態の進行の反面、防衛企業、その幹部、働く人の間に、逡巡、迷いがあることがわかりました。安倍首相や防衛トップが笛ふけど踊らず、の状況が広くあります。大きな会場で準備される武器展示会もまったく盛り上がりませんし、やはり「死の商人」は企業イメージがよくない。海外軍事企業の幹部は「日本の企業にはまったくやる気が感じられない」と言っていました。ある関連企業の社長さんは「人を殺める兵器は作りたくないんだ」と話してくれました。こうしたところにも憲法9条がしみ込んでいるというか、戦後蓄積されてきた日本の平和の力があると感じました。しみ込んだ力というものは、そう簡単には崩せない。安倍首相が9条改憲を急いでいますが、それを阻止してゆく力もまた国民にはあるのではないか、と感じます。

民主主義を支える人たち

昨年、東京・立川革新懇に招かれ、武器輸出問題の講演をしました。地域で社会や政治のことについて考え、地道に活動しているグループがあることに驚きました。この方たちが日本の民主主義を支えている、と私の方が励まされました。

多くの市民が声をあげて訴えたいことを伝え、みんなが権力に問いただしたいことを質問する、そういう記者であり続けたいと思います。